

# デュルケームの集団的意識による 個人行動の拘束の理論および自殺論の解説

— 飲酒問題の理解のための新しい手引きとして —

Interpretational commentaries for theories of restriction  
of individual behaviors by the collective consciousness and  
the classification of features of suicide advocated by Durkheim.

: For a new approach for understanding of the problems  
of alcohol abuse

横山 裕一\*

慶應保健研究, 36(1), 047-051, 2018

**要旨**：大学での飲酒による死亡事故が多く報告されており，その防止は重要である。その目的で筆者は大学の講義で学生に飲酒の医学・生物学的な側面のみならず，歴史的，民俗学的側面も解説しているが，現状では「危ないので注意せよ」以上の結論は引き出せていない。一方，これらの事故は主に集団で発生するので，その理解に社会的アプローチが重要と考えた。フランスの社会学者デュルケームの膨大な業績の中に，社会に形成された collective consciousness が個人行動を拘束していることを示し，および，そこから発展して，社会の形態と自殺の類型の相関を示したものがあつた。筆者はこれらが飲酒問題の新しい理解の手引きになりうると考え，まず本稿で，それらの解説を行った。尚，デュルケームは自殺の類型として集団本位的自殺，個人本位的自殺，アノミー的自殺，宿命の自殺を提示しているが，筆者は日本人特有の自殺の類型として「お詫び自殺」という第5の類型を加えることが可能と考えたのでその解説も行った。尚，これらの理論に基づいた「アルコール乱用，特に一気飲み」の理解については本誌に掲載される別稿に譲る。

**keywords**：デュルケーム，集合的意識，個人の行動原理，自殺の形態の分類，お詫び自殺

Durkheim, collective consciousness, principle of individual behavior,

classification of features of suicide, suicide for apology

## 1. はじめに

社会の中で各個人は常に正しい行動を行うわけではなく，間違つた行動を起こすこともあり，時にそれが，取り返しがつかなくなることもある。看過できない結果が起つた場合，通常，「個人が悪い」，「個人の考えが足りなかつた」，

などと個人が批判され，個人が謝罪し，時に罰を受ける。また，「個人への教育が足りなかつた」という理由で，個人への教育が施される。もし，個人の行動が全て個人の価値観によって規定されているのであれば，この一連の流れは正しい。しかし，個人の行動を規定するものが必ずしも

---

\*慶應義塾大学保健管理センター

(著者連絡先) 横山 裕一 〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

個人の価値観だけでないとするれば、その対応に修正が必要であろう。実際に、フランスの社会学者デュルケーム（Émile Durkheim 1858～1917年）は、個人の行動様式の決定に個人の価値観以上に社会の価値観が重要になる場合があるとしている。

近年、多くの大学キャンパスでアルコール乱用（特に一気飲みによる急性アルコール中毒）が起り、時に死者が出るという傷ましい事件が発生している。当大学のキャンパスでもその報告があり、大学は危機意識を持って、いくつかの対策を打ち出している。詳細は別稿<sup>1)</sup>に譲るが、筆者も学生への講義を通して、アルコール乱用が死に至る医学・生物学的理由に加え、なぜ、人は危険な飲酒を容認するようになったかという歴史的、民族的背景に関する情報発信を行っている。しかし、大学学生課、および筆者が行っている、「アルコール乱用」という学生の“間違った行動”への対応の現状を鑑みると、アルコール乱用は、「乱用する個人が悪い」、それは「乱用する人の考えが足りない」、「乱用は間違っているという教育を行えば問題は解決する」、という上述の発想の枠に留まっており、そのソリューションとして、「アルコール乱用が恐ろしいことを教える」というアイデアを超えるものではない。

大学生の「アルコール乱用、特に一気飲み」、いわゆる“間違った行動”は、集団の中で発生することが多い。この詳細も別稿<sup>1)</sup>に譲るが、もしそうであれば、その理解のために社会学的アプローチが重要と考えるのは自然な発想である。その中で、最近筆者はデュルケームの学説に触れる機会があり、それがアルコール問題の理解への応用が可能であると考えた。本稿では、デュルケームの膨大な業績の中から、筆者が目した「集合的意識の理論」およびそこから派生と考えられる「自殺論」を解説する。尚、筆者が構築したデュルケームの学説から考えるアルコール乱用の背景についての私論も別稿<sup>1)</sup>に譲る。

## 2. デュルケームの collective consciousness（集合的意識）の理論

デュルケームは、1895年に出版した彼の著書 *The rules of sociological method*<sup>2)</sup> の中で、「社会に形成された価値観が人の意識を形成する」としている。彼は、「個人が社会の価値観と折り合いをつけること」、は社会に適合する上で、即ち、社会の中で生きていく上で、必須の意識であるが、さらに、その意識は個人の思考、感情を拘束し、個人の行動をコントロールしようとしている。彼はその社会に形成された価値観を social fact（仏語では faits sociaux, 社会的事実）と定義している。彼は、1893年に出版した別の著書、*The division of labor in society*<sup>3)</sup> の中で、social fact とほぼ同義で collective consciousness（集合的意識、仏語では la conscience collective）という概念も提唱している。collective consciousness に関して、仏語の conscience が英語の conscience（良心）と訳され、「社会における良心、即ち道徳」と解釈され、デュルケームの主張は「道徳が人間の行動を規定する」と誤解されている場合もあるようであるが、仏語の conscience には英語の consciousness（意識）の意味も含まれている。道徳も collective consciousness の一つであることは間違いがないが、デュルケームの真意は、道徳のみならず、社会に形成された価値観全般が個人の行動に影響を与えうるというものである。

筆者は、本来個人の自由であるはずの服装の選択に対する外的拘束がその良い例と考える。制服が決まっている職場や学校、または、ドレスコードが決まっている式典などでは、社会や集団の意向で服装に強い拘束力が発揮され、そこに個人の価値観が入り込む余地はない。「流行」も社会で形成された価値観であり、その背景には、その流行を支持するという社会の意思、即ち、collective consciousness が存在する。よって、「各個人が流行に従って服装を選択する」ことも collective consciousness に従った行動であると考えられる。さすがに、消費者の自由である

服の購買行動に社会や集団から強い強制力は働かないが、例えば、あるグループで、流行に遅れていると相手にされないという風潮（それも小社会における collective consciousness と考えられる）が形成されている場合など、そのグループ内でうまく生きていくために、個人の価値観とは関係なく流行に従った服装の選択が余儀なくされることはあり得る。

また、「コマーシャル」はマスメディアを介した、商品の売り手による意図的な collective consciousness の形成であり、個人の購買行動に大きく影響を与えているのも事実である。これらのことから、個人が社会で生きていくために collective consciousness に迎合することは、多かれ少なかれ必要なことでもあることも理解できる。

尚、「collective consciousness は人の意識の中に形成される社会で生きていく上で重要な考え方」ということから、筆者は当初 collective consciousness は、道徳でないまでも、「常識」と理解できると考えた。しかし、上述の「流行に基づいた個人の服装の決定」を考えた場合、「流行している服」は必ずしも万人の「常識」ではない。もちろん、それを支持する層にとっては常識であるが、過去に別の流行を経験した年上の層にとっては「非常識」と映るかもしれない。即ち、collective consciousness は「道徳的/非道徳的」「常識的/非常識的」のような価値観を超えたものである。

### 3. デュルケームの自殺論

19世紀になり欧州で自殺者が増えたことを背景にデュルケームは1897年に「自殺論」<sup>4)</sup>を執筆した。彼はその書の中で自殺を4つの類型に分類し、また、夫々の型の自殺が起こりやすい社会の特徴を記した。自殺も人間行動の一つで、違った特徴を持つ社会では違った collective consciousness が形成されていると想定すると、自殺も collective consciousness による人間行動の拘束の例であると考えられる。

彼が提唱した自殺の4類型はそれぞれ集団本位的自殺、個人本位的自殺、アノミー的自殺（混乱状態の自殺）、宿命的自殺と命名されている。尚、筆者は、日本特有の自殺として、この4類型に「お詫び自殺」という第5の類型を加えることを提唱する。

#### 1) 集団本位的自殺

集団本位的自殺は、個人と集団の結びつきが強固な社会で起こる自殺とされる。通常そのような社会では、集団の価値観が絶対的で、個人はその価値観に服従している。また、このような社会では、組織に対する献身や自己犠牲が美德と考えられ、教育などによって集団構成員はそれを信じ込まされ、疑わなくなっていることが多々あるとされる。そのような状況においては、自殺が強要されても通常強要された側もそれを受け入れる。第二次世界大戦中に日本の軍国主義の下に施行された若い兵士の特攻の少なくとも一部が典型例と考えられる。

#### 2) 自己本位的自殺

自己本位的自殺は、逆に、個人と集団の関係が薄い社会において、個人の孤独感や焦燥感をベースに起こる自殺とされる。孤立する中で死を選ぶことは現代社会の中でよく見受けられる。報道などで、「誰かに相談できれば死を選ばなかったかもしれない」というコメントがよく見受けられるが、それがこのタイプの自殺であろう。換言すると問題を抱えて孤立してしまうと、一人では解決できず、最終的に死を選ぶということである。デュルケームはこのタイプの自殺は、個人主義の拡大に伴い増えてきたとし、農村よりも都市、既婚者よりも未婚者、など、孤立する可能性が高い環境での高い自殺率を説明するものとしている。筆者の印象では、デュルケームの類型の中で最も理解可能な自殺であり、同時に、過去に比べ現代社会に多い可能性もあると推察する。また、自殺ではないが、社会との関わりを絶ち、ひっそりと息をひきとる孤

独死もこの範疇に入ると考える。

### 3) アノミー的自殺

アノミー的自殺は、個人と集団の関係とは関係なく、社会的規制が弱い状況で起こる自殺とされている。そのような状況ではより多くの自由の獲得が許されているので、個人の欲求はどんどん膨らみ、その欲望が無限大に増大し、それが実現できないことに幻滅し、自殺してしまうケースと説明されている。デュルケームは不況の時期より好景気の時に自殺者が増えるとし、その増加をこのタイプの自殺の増加のためとしている。しかし、筆者の印象では、この好景気に自殺が増加するという知見は日本では観察されず、自殺は不況の時期に多いと考えるのが常識的と推察する。その理由として、筆者は後述する日本に特有な第5の類型、「お詫び自殺」の存在を想定している。

### 4) 宿命的自殺

宿命的自殺は、社会の規制が非常に強く、個人の欲求が過度に抑圧されている状態で起こる自殺とされている。デュルケームはこの類型に対して実際例を挙げておらず、アノミー的自殺の対極としての思弁的概念の可能性もあるともされている。この宿命的自殺は「生まれながらに定められている自殺」という意味であるが、デュルケームの研究者の宮島喬氏は「心中」をこの例として挙げている<sup>5)</sup>。過去の日本には、明文化されてはいないものの「身分不相応」という強い社会的規制があり、そこに「許されない結婚」が存在し、その状況下で結婚を約束した二人が別れることもできず自殺してしまうというケースである。その背景には「結婚の成就」という欲求の過度の抑制が存在する。

また、筆者は、日本に伝承される姥捨山伝説<sup>6)</sup>がこれに当たるのではないかと考えている。過去の日本における貧しい集落では、若い世代が生き残って行くために、ある年齢に達した老人は山に捨てられそのまま死ぬこ

とを強要された、という物語である。この話が実話であるかどうかは不明であり、また、種々の脚色されたバージョンもあるが、日本人の意識の中にその情景が受け継がれていることは事実である。少なくとも伝承の中では、捨てられる老人の「生きたい」という欲求は完全に抑圧されており、デュルケームの定義にあてはまる。これは一見、集団本位的自殺とも考えられるが、捨てられる老人は決して死ぬことを自己犠牲と考えたり、自殺の選択を美化していないことなどから、あてはまらないと考えた。

### 5) 日本人特有の第5の自殺の類型－お詫び自殺

上述のデュルケームの4つの自殺の類型に加え、筆者は、日本人特有、少なくとも、欧米人には想定されていないであろう自殺の類型、即ち「お詫び自殺」、を提唱する。日本人（特に高い年齢層）の中には、他人に迷惑をかけた場合、それを恥と感じ、その気持ちが高まると自殺してしまうことがあると考える。実際にインターネットで「自殺」「お詫び」と入力すると、「死んでお詫びをしなければならない」という記述が沢山出てくる。不況時に借金を背負い、債権者や家族に迷惑をかけたということで自殺してしまう例がこれにあたる想定している。筆者は、このタイプの自殺の存在が、日本では、デュルケームが指摘する「不況期に比べ好況期に自殺が多い」という印象が得られにくい原因の少なくとも一部と推察している。

個人の心理と行動の関係の研究者菅原健介氏は羞恥心は不安感の一種であるとしており<sup>7)</sup>、人は、所属する集団に受け入れてもらう目的で、自己像を確立するが、不祥事などでその自己像が崩壊した場合、その集団から排斥されるという不安が起こり、それが羞恥心の本質としている。筆者は、多くの日本人はこの不安を強く感じ、そこに「お詫び自殺」が成立していると推察する。また、もし、羞恥心

が自殺の原因になるのであれば、日本人にとっては、集団への帰属が命と同程度に大切であることを示す。筆者の提唱する第5の自殺の類型がデュルケームの類型に現れない理由は、欧米では日本ほど集団への帰属が重要視されないためではないかと考える。もし、社会との関係が切り離されるかもしれないという不安状態が「社会からの孤立」と看做するのであれば、このお詫び自殺は自己本位的自殺の一部と考えられる。しかし、お詫び自殺をする人は、命を絶つまで、社会の目を気にしており、社会から完全に孤立しているわけではないので、新しい類型として提唱した。

#### 4. おわりに

デュルケームの集合的意識論、および自殺論を概説した。デュルケームは、前者において、社会に形成された意識、即ち、collective consciousnessが個人の思考、感情を拘束し、個人の行動をコントロールすることがあるとしている。また、後者において、自殺を4つの型、即ち、集団本位的自殺、個人本位的自殺、アノミー的自殺（混乱状態の自殺）、宿命の自殺、に分類し、それぞれの型と社会の特徴（個人と集団の結びつきの強弱、社会的規制の強弱）に相関があることを示した。自殺を個人の行動の一つと考え、さらに、違った特徴を持つ社会には違ったcollective consciousnessが形成されるであろうことを想定すると、自殺に至る思考もcollective consciousnessによる個人の行動（思考）の拘束の一つと考えられる。また、筆者は日本人特有の自殺として「お詫び自殺」という第5の類型を提唱した。

筆者はこれらの理論を近年大学で問題になっている、「アルコール乱用、特に一気飲み」という“誤った行動”の理解への応用が可能と考えている。さらに、その理解に基づき、従来の過剰飲酒の危険性を訴えるのみの「アルコール乱用、一気飲み」対策（または教育）から一步踏み込んだ新しい展開が可能と考えている。そ

の理論展開は本誌の別稿<sup>1)</sup>で行う。

#### 文献

- 1) 横山裕一. デュルケームの集団的意識による個人行動の拘束理論と自殺論モデルを用いた日本における新しい急性アルコール乱用の理解—大学における飲酒教育の新機軸の構築. 慶應保健研究 2018; 36: 53-60.
- 2) エミール・デュルケーム. 社会学的方法の規準 (原著1895年, 宮島喬訳). 岩波書店; 東京: 1978.
- 3) エミール・デュルケーム. 社会分業論 (原著1893年, 田原音和訳). 筑摩書房; 東京: 2017.
- 4) エミール・デュルケーム. 自殺論 (原著1897年, 宮島喬訳). 中央公論社; 東京: 1985.
- 5) 宮島喬. デュルケーム「自殺論」を読む. 岩波書店; 東京: 1989.
- 6) 光明寺ホームページ. 姥捨山.  
<http://www.koumyouji.com/houwa/31.htm>  
(2018年4月3日閲覧)
- 7) 菅原健介. 人はなぜ恥ずかしがるのか—羞恥と自己イメージの社会心理学. サイエンス社; 東京: 1998.